

Elizabeth C. Traugott and Richard B. Dasher:  
*Regularity in Semantic Change*

Cambridge: Cambridge University Press, 2002. xx+341 pp.

---

前田 満

---

## 1. 本書の概要

本書の内容について論ずる前に、参考までに本書の構成を簡単に見ておきたい。本書は次の7章からなっている。

1. The Framework
2. Prior and current work on semantic change
3. The development of modal verbs
4. The development of adverbials with discourse marker function
5. The development of performative verbs and constructions
6. The development of social deictics
7. Conclusion

第1章では、意味変化の諸相と本書の枠組みが詳細にわたって概説される。第2章は19世紀の言語学者ブレアル (M. Bréal) にはじまる先行研究と、近年の文法化研究の成果をふまえた意味変化研究の現状についての理路整然とした概説となっている。ここまでの部分は、この分野の研究に関心をもつ者にとってまたとない概論だといえるが、同時に、啓発的な示唆にも富んでいる。第3章から第6章までは、具体的な言語現象に焦点を当てた事例研究となっており、これにより第1章で提案された意味変化の規則性が実証される。第7章は本書のまとめである。紙数の関係上、本書評では、第1章の提案のうち、重要だと思われる数点に焦点をしばって本書の枠組みを説明したい。

## 2. 意味変化における話し手の役割

従来の史的言語学研究では、言語変化の説明のさいに聞き手の役割ばかりが重視され、逆に話し手の役割は軽視される傾向にあった。これに対し、近年の文文化研究では、機能論的な立場から、言語変化を談話における話し手の問題解決 (problem-solving) の結果と考える見方が強まっている (Heine, Claudi and Hünemeyer (1991) など参照)。本書はこの見解をさらにおし進め、言語変化で中心的な役割を果すのは聞き手ではなく話し手であると主張し、自らのアプローチを「発話志向の言語変化観」 (production-oriented view of language change) と呼んでいる。著者によれば、意味変化のおもな駆動因は、表現選択や言語刷新 (innovation) といった話し手が行う談話上の方策である。このため、意味変化の要因を話し手の活動の場としての局所的コンテキストと切り離して考えることはできないと著者はくり返し強調する。著者の主張する聞き手から話し手への視点の変化が今後の言語変化研究の進展の契機になることを期待したい。

## 3. 主観性と主観化

本書が分析の中心にすえる現象は主観化 (subjectification) である。主観化とは、もともと具象的な意味を表していた言語表現がしだいに主観性 (subjectivity) をおびてゆく意味変化現象である。また、主観性とは、話し手の信念や視点、態度などを合図する概念群である。例えば、英語では、主観性は I think や I guess といった挿入句、may や must のような法助動詞、maybe や hopefully 「願わくば」といった副詞によって表される。これらの表現はいずれもかつては具象的な意味をもった表現であったが、次第に主観性をおびて現在の意味になったと考えられる。例えば、法助動詞 may (<古英語 magan) はもともと 'to be strong' の意味の本動詞だった。この意味は事物の属性に言及するという点で具象性が高い。この意味から 'to be able' という能力 (ability) の意味が派生し、さらに後代になると、現在見られる 'it's possible that ...' という認識様

態 (epistemic) の意味も生じてくる。‘to be strong’ に較べると ‘to be able’ は能力という事物の抽象的性質に言及しているという点でより主観的である。この ‘to be strong’ から ‘to be able’ への変化が主観化であることはもちろんだが、認識様態の意味の出現によって may の意味は飛躍的に主観化されるのである。

ここで、may の辿った主観化の過程を簡略化して表すと(1)のようになる(主観性には様々な程度があるので、現実には(1)の矢印は漸進的な推移である)。

(1) ‘to be strong’ > ‘to be able’ > ‘it’s possible that ...’

objective —————> subjective

重要な点は、主観化が一方向的 (unidirectional) な意味変化であるということである。つまり、具象的 > 主観的というパターンの意味変化は多数見られるが、その逆の主観的 > 具象的というパターンは少数の例外を除いて見られない。この意味において、意味変化には特定可能な規則性があるといえるのである。

このように述べると、具象的 > 主観的という意味変化のパターンがなにか文法に対する制約であるかのような印象を与えてしまいかねない。だが、この印象はまったくの誤りである。まず、Elizabeth C. Traugott が別の論文 (Traugott (2001)) で明言しているように、意味変化の一方向性はあくまでも言語普遍性 (language universal), つまり、観察された強い傾向なのである。本書では、主観化が一方向的に起こる理由を言語内的な制約ではなく、談話の構造と人間の認知的特性から生ずる傾向だとしている。もう一点つけ加えると、具象的 > 主観的という主観化のパターンは個々の表現が辿る意味変化の道筋に関して観察される一般化であって、様々な表現の意味がいつせいに主観化されるということではない。著者はこの点をとりわけ強調している。著者のとるアプローチでは、意味変化の研究はあくまでも個々の事例ごとに行われねばならないのである。

#### 4. 主観化から相互主観化へ

主観化の研究は以前から連綿となされており、けっして新しい研究テーマとはいえない。すでに Elizabeth C. Traugott の一連の研究を中心にかなりの成果がえられている。本書の目新しさは、主観化の研究をさらに発展させ、相互主観化 (intersubjectification) をも研究の射程にとり込んだところにある。まず、相互主観性 (intersubjectivity) とは、日本語の敬語などを念頭に浮かべると理解しやすいが、聞き手に対する話し手の配慮・姿勢などを表す概念群である。ことばをかえれば、話し手対聞き手という談話の構造を言語構造に反映させる特性ということである。英語でいえば、口語の y'know「だって～だろ」、in fact「それどころか」といった談話標識 (discourse marker)、譲歩の may などがそれにあたる。ここで、(2 a) と (2 b) の解釈を比較してみたい。

(2) a. It may be true.

b. I may be poor, but I'm not that poor.

(2 a) では may は 'it's possible that ...', つまり話し手の主観的見解を表している。これに対して、(2 b) の may には譲歩の意味がある。譲歩とは、聞き手の断定をしぶしぶ認めながら、それと相反するような断定をするという発話行為である (ゆえに (2 b) は概略 'although I am poor, as you say ...' と言いかえが可能である)。つまり、(2 b) では may は話し手の主観的見解ではなく、進行中の談話における聞き手に対する話し手の態度を合図しているのである。譲歩の may は認識的 may から発達したと考えられ、しかもこの発達も相互主観性の増大をとまなうので、典型的な相互主観化の一例と考えることができる。

これまでの may が辿った意味変化の過程を譲歩の may の発達も含めて図示すると、全体が一方向的な意味変化の過程を形成する。

(3) 'to be strong' > 'to be able' > 'it's possible that ...' > 'although ...'

objective —————> subjective —————> intersubjective

第3章から第6章までの事例研究を通じて、著者は法助動詞や談話標識といった様々な表現の相互主観的な意味が主観的な意味から一方向的に生ずるこ

とを実証している。

## 5. まとめ

従来の史的言語学の研究では、ややもすると音韻・形態的現象や統語現象といった言語の形式的な側面の変化に焦点が置かれがちであった。おそらくこれらの領域では、音韻法則に代表されるように、変化が比較的規則的・画一的に思えるからであろう。これに対して、意味変化はもっとも規則性に乏しい現象に思われる。この点からすると、意味変化にも言語と時代をこえた規則性が見られることを実証しているという点で本書は注目すべき研究書であるといえる。もちろん意味変化に規則性があるという見方はけっして新しいものではない。むしろ本書の意義は、この考えをかつてないほど徹底的に追求し、集大成したところにある。いっぽう本書に欠ける点は、(相互)主観化という現象が言語表現の意味をどのような形で変化させるかという点についてあまり具体的な分析・記述がなされていないということである。したがって、本書のアプローチはもっと厳密な意味分析によって補完する必要があるように思われる。

最後に、本書評では、便宜上法助動詞 *may* の辿った意味変化の過程を例にとって(相互)主観化という現象を説明してきたが、本書では他にも法助動詞 *must*、談話標識 *in fact*、そして *promise* などいわゆる遂行動詞 (*performative verb*) をはじめ、数多くの言語表現が扱われていることをお断りしておく。

## 参考文献

- Heine, B. Claudi U. and F. Hünnemeyer. 1991. *Grammaticalization*. Chicago: University of Chicago Press.
- Traugott, E. C. 2001. Legitimate counterexamples to unidirectionality. Ms. Stanford University (<http://www.stanford.edu/~traugott/ect-papersonline.html>).